

前橋文学館報

萩原朔太郎記念
水と緑と詩のまち

No.42 2015.6



萩原朔太郎賞受賞詩人より

第四回 安藤元雄（第七回受賞者）

廣瀬川のほとり

前橋文学館の入口のすぐ前を、古くから人工の用水路だったという廣瀬川が流れている。いや、こう

書いたのでは本当は叙述の順序が逆で、廣瀬川の岸辺を選んで前橋文学館が建てられた、と書く方が正しいだろう。街なかを流れるコンパクトな川にしては、水量が豊かで流れも速い。このあたりの岸辺は、あたかも文学館の前庭のような一種の公園として、植え込みや遊歩道が整備され、歴代の萩原朔太郎賞の受賞者たちの小さな詩碑がところどころに配置されていて、それらのやや上流に、もっと大きく、萩原朔太郎の詩「廣瀬川」『純情小曲集』所収の「郷土望景詩」の中の一編）の碑が立っている。

廣瀬川白く流れたり

時さればみな幻想は消えゆかん。

われの生涯らいつゐを釣つらんとして

過去の日川辺に糸をたれしが

ああかの幸福は遠きにすぎさり

ちひさき魚は眼めにもとまらず。

萩原朔太郎が故郷の前橋でしばしば訪れ、そこで物思いにふけた水辺としては、彼の母校である前橋中学に近く、街のすぐはずれに河原をひろげている利根川の方が、真先に想起されるだろう。

きのふまた身を投げんと思ひて

利根川のほとりをさまよひしが

「……」

おめおめと生きながらへて

今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。

（利根川のほとり）

彼の物思いは、しばしば、郷土に対して激越だった。

彼は郷土の人々が彼に対して無理解であり、軽蔑的

な態度を示すことを、繰り返し訴えている。

いかなれば故郷こきやうのひとのわれに辛く

かなしきすももの核たねを噛まむとするぞ。

「……」

われを嘲けりわらふ声は野山にみち

苦しみの叫びは心臓を破裂せり。

（公園の椅子）

と歌ったばかりでなく、《さびしき椅子に「復讐」の

文字を刻みたり》というような、おだやかならざる

言葉さえ吐く。詩集『純情小曲集』の巻頭、「出版に

際して」という文章では、《人人は私に情なくして、

いつも白い眼でにらんでゐた。単に私が無職であり、

もしくは変人であるといふ理由をもつて、あはれな

詩人を嘲辱し、私の背後うしろから唾つばをかけた。》とも書いて

いる。そんなことが事実であったのかどうかより

も、彼がこのような被害意識を強く持っていたこと

の方が重要である。その意識は、さながら毒のように、

彼の心を内側から蝕んでいた。

それならば、彼はついに、郷土と決定的に対決す

るほかはなかったのだろうか。おそらくそうではあ

るまい。たとえば、『氷島』に収められた名高い詩「歸

郷」には、東京で妻に去られ、生家にあずけるほかはなくなつた二人の子供をつれて、おめおめと前橋に帰る夜汽車の中で、《汽笛は闇に吠え叫び／火焰ほのほは平野を明るくせり。》という悲壮な二行のあとへ、ふと息を抜くように《まだ上州の山は見えずや。》という一行を書き留めている。この一行は文意こそなおも苛立つているけれども、詩の中で呼吸としては、苛烈な毒はもはやまったく感じられない。読んでいて、この一行まで来ると、何かほっとするものを味わう。

このことは、冒頭で触れた「廣瀨川」と題する詩についても言える。故郷への愛憎の厳しくせめぎ合う「郷土望景詩」の中でも、この小さな一篇だけは、いわば肩の力の抜けたような、おだやかな表情を見せ、ゆつくりと回想を楽しんでいるように見える。

実は、萩原朔太郎は、廣瀨川については利根川ほどに詩の筆を費やしてはいない。散文詩の最後を飾る「物みなは歳日と共に亡び行く」の冒頭に次のような六行詩を、あたかも先に引いた「廣瀨川」を再録したかのような姿で置いているくらいのものである。

物みなは歳日としひと共に亡び行く。

ひとり来てさまよへば

流れも速き廣瀬川。

何にせかれて止むべき

憂ひのみ永く残りて

わが情熱の日も暮れ行けり。

ここでも毒が抜けていることは同じだ。そのことが、言葉の意味の上では取り返しのつかない時の流れを嘆きながら、気分としてはむしろおだやかな諦念のうちに、一種の安定を取り戻している。

そして、同じ「物みなは歳日と共に亡び行く」の中に掲げられた《父の墓に詣でて》という添え書きのある次の六行詩が、詩人と郷土との間の長い睨み合いの果てによくやく訪れた、和解の時を語っているように見える。

わが草木さうもくとならん日に

たれかは知らむ敗亡の

歴史を墓に刻むべき。

われは飢ゑたりとこしへに

過失を人も許せかし。

過失を父も許せかし。

《私の生涯は過失であつた。》と断じた萩原朔太郎

は、生涯の終わり近くになつてから、《だがその「過失の記憶」さへも、やがて此所にある万象と共に、虚無の墓の中に消え去るだらう。》と一歩しりぞくことで、ようやく自分の居場所を確認することができた。《過失を父も許せかし》という言葉は、おそらく彼がつぶやくことのできた最大の和解の言葉である。それもまた、廣瀬川の絶えまない速い流れが無言のうちにもたらしたものであるかのように、私には思われる。

安藤元雄(あんどう もとお)

1934年東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。卒業後の1957年に第一詩集『秋の鎮魂』を刊行。時事通信社の特派員を経て、國學院大學助教授、明治大学に移りのちに教授。

1981年『水の中の歲月』で第11回高見順賞、1988年『夜の音』で第6回現代詩花椿賞、1999年『めぐりの歌』で第7回萩原朔太郎賞、2004年『わがノルマンディー』で第42回藤村記念歷程賞、第19回詩歌文学館賞を受賞。

フランス文学研究、翻訳でも著名。翻訳に『シュペルヴィエル詩集』(1982年)、ボードレール『悪の華』(1983年)、エッセイ集に『フランス詩の散歩道』(1974年)ほか。

2002年紫綬褒章受章。明治大学名誉教授、現代詩人会会員、日本フランス語フランス文学会会員。